



# 日本ラテンアメリカ学会 会報

2003年7月1日



No. 81

1. 第24回定期大会開催
2. 第24回定期大会総会報告
3. 理事会報告
  - 第102回理事会
  - 第103回理事会
4. 定期大会・研究発表
5. 研究部会報告
6. 『ラテンアメリカ研究年報』  
第24号の原稿募集について
7. 本年9月のラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟(FIEALC)  
第11回大会参加のお願い
8. 事務局から

## 1. 第24回定期大会開催

6月7日(土)、8日(日)の2日間にわたり、神奈川大学において第24回定期大会が開催された。会員、非会員も含め約300名の参加者があった。9月には大阪でFIEALCの第11回大会も開かれる予定であり、その点でも今大会は重要な意味をもった。

定期大会を開催するにあたり、実行委員会としては「世界へ向けて発信できる大会」を目指してささやかな試みを行った。シンポジウムを2つ設けたほか、本来であれば海外から招待講演者を招聘するところを、今回はベネズエラ中央大学のDaniel Mato博士をシンポジウムのメイン報告者として迎えた。各分野の専門家の深い研究成果を踏まえた報告をもとにフロアーとの間でじっくり意見交換ができる場にしたいと考えたためである。そのため報告者にはあらかじめペーパーを用意していただき、参加者に前もってコピーを配布した。

両シンポジウムとも中味の濃い報告が得られただけではなく、充実した議論が繰り広げられた。とくにシンポジウム1はスペイン語と英語による報告と討論となつたが、これも

画期的なことであった。

分科会は6つ、パネルは5つ開かれた。若手だけではなく多くのベテラン会員の参加があった。また、文学や美術も含めた広範な分野をカバーすることができた。

なお、今大会では大会プログラムもシンポジウムの報告等も予定数を大幅に上回る部数を用意したにもかかわらず、予想を越える参加者があったため不足が生じた。この場をお借りし、お詫び申し上げる。シンポジウムについては何らかの形で活字にできればと考えている。

次期定期大会は同志社大学で開かれる。日程等詳細についてはのちほどお知らせする。

(後藤政子)

## 2. 第24回定期大会総会報告

日 時：2003年6月7日(土) 13:30～14:30  
場 所：神奈川大学11号館11番教室  
議 長：恒川恵市(東京大学)

総会には36名出席、委任状152通を合わせて定足数(会員総数525名の5分の1)に達した。

### 2002年度事業報告

今井理事長より以下の報告があった。

- (1) 第23回定期大会を2002年6月1日・2日の両日、慶應義塾大学(三田)にて開催した。また第24回大会を本日7日・明8日の両日、神奈川大学にて開催中である。
- (2) 各研究部会が次の日程で開催された。

2002年11月 中部日本(愛知県大)、  
東日本(慶應三田)

12月 西日本(神戸大)

2003年3月 中部日本(名古屋大)、  
東日本(上智大)

4月 西日本(神戸大)

出席者数は10～20人程度。ただし30人を越えた研究会もあり、活性化の兆候がみられる。

- (3) 『研究年報』22号を発行し、23号を準備・発行・配布した。
- (4) 会報を2002年7月1日に78号、同11月1日に79号、2003年3月1日に80号を発行した。

- (5) 新会員名簿編纂につき、松下(洋)理事を中心に目下準備中である。調査項目を増やすか、また常勤、非常勤を明記するなど、会員の意向を入れ検討中である。
- (6) 学会ホームページの更新・維持につき、担当の三田理事を通じ、田村(梨)会員の協力を得て充実化を図りたい。
- (7) 学会事務センターとの業務委託を今年4月1日から1年間更新した。
- (8) 日本学術会議の会員選出方式が変わる見通しである。現行方式の最後の適用となる今期、当学会からは民族学・人類学部会に三田理事を推薦した。来る7月、地域研究関連学会の連絡交流会が発足する予定。5月18日第1回準備会(於・東大駒場)に三田理事が出席、今後、より増大するであろう地域研究の重要性に鑑み、連携を強化するための取組が進められる予定である。
- 一方、昨年より科研費に「地域研究」の項が立ったが、ラテンアメリカ分野からの応募は少なく、積極的な活用をお願いしたい。
- (9) FIEALC日本大会は実行委員長の山田理事以下、学会として実行委員会に参加、4月末締切時点での発表申込みは約500件に達した。

事業報告は原案どおり承認された。

#### 2002年度決算・監査報告

校務のため欠席の堀坂会計担当理事に代わり、今井理事長より、配布資料(別掲)に補足説明を交え、決算報告がなされた。水野一監事より監査報告があり、決算報告・監査報告ともに承認された。

#### 2003年度事業計画

- 今井理事長より配布資料に沿って以下の提案があった。
- (1) 第25回定期大会は2004年6月5日・6日に開催する。開催校を早急に決定したい(関西の見通し)。
  - (2) 研究部会は秋季および春季の2回開催予定。発表者、出席者とも増加することを期待したい。
  - (3) 『研究年報』23号を編集、発行し、配布する(本日配布)。
  - (4) 会報は3回の発行を予定。次号81号は今大会報告を掲載するため急ぎ原稿を集約する必要あり、関係者の協力をお願いしたい。
  - (5) 新会員名簿の編纂と刊行を松下(洋)理事を中心進めること。
  - (6) 学会ホームページにつき、迅速な更新を期しアルバイト活用を検討したい。
  - (7) FIEALC大会へ向けて山田実行委員長より補足説明がなされた。

《2002年度決算》	
収入の部	
1. 会費収入	3,368,800
2. 年報バックナンバー売上げ	1,771
3. 利子	234
小計	3,370,805
4. 前年度より繰越	6,121,626
合計	9,492,431

支出の部	
1. 印刷費	
2. 学会事務センター	1,088,071
3. 第23回定期大会経費	470,113
第24回定期大会経費	500,000
4. 理事会経費	151,900
5. 人件費	0
6. 郵送・通信費	64,400
7. 選挙管理委員会経費	36,173
8. 消耗品費	1,852
9. 研究部会助成	700
10. 雑費	6,760
小計	3,141,294
11. 次年度への繰越	6,351,137
合計	9,492,431

#### 《2003年度予算》

収入の部	
1. 前年度繰越	6,351,137円
2. 会費収入	2,383,500円
内訳: 正会員 7,000円×273人=1,911,000円 学生会員 5,000円×57人= 285,000円 準会員 2,500円× 3人= 7,500円 賛助会員30,000円× 6件= 180,000円	
合計	8,734,637円

支出の部	
1. 印刷費	1,480,000円
2. 学会事務センター	1,950,000円
3. 第25回定期大会経費	500,000円
4. 理事会経費	250,000円
5. 人件費	200,000円
6. 郵送・通信費	150,000円
7. 選挙管理委員会経費	30,000円
8. 消耗品費	30,000円
9. 研究部会助成金	20,000円
10. 雑費	10,000円
11. 予備費	50,000円
小計	4,670,000円
繰越金	4,064,637円
合計	8,734,637円

実行委員12名はすべて本学会会員で、学会挙げての協力に謝意を表したい。会期は9月24日～27日、民博および阪大を会場とする。報告申込み約500件の内訳はメキシコから129件、日本109件、ブラジル98件、ベネズエラ36件、米国29件、スペイン13件など。日本15名、国外45名から分科会主催の申込みあり。登録・送金に至っていない申込み者が圧倒的。ホームページの指示に従い、手続きを進めて頂きたい。プログラムの概要是ホームページ上に順次発表していくが、6月23日のプログラム委員会(於・東京)で詰める予定。外務省、大阪府、大阪市、LAEBA(米州開銀+アジア開銀合同研究所)から後援を得ている。在日ラテンアメリカ・カリブ外交団の後援については折衝中。UNESCO、FLACSO等にも打診したい。予算については未確定部分が大きいが、全体で2,000万円ほどの規模を想定。補助金額が参加者数に左右されるものもあることから、積極的な参加をお願いしたい。また学生会員は参加費が半額(6,000円前後)となるため、院生の参加を奨励頂きたい。会員名簿刊行に際し、校正刷には理事が目を通すようにとの意見があり、事業計画は原案どおり承認された。

#### 2003年度予算案

今井理事長より予算案(別掲)の提案があった。定期大会拠出金50万円の適否、会費収入が対前年100万円減になっている理由について質疑応答があり、予算案は原案どおり承認された。

定期大会総会後の調整を経て、第25回定期大会は2004年6月5日(土)、6月6日(日)両日、同志社大学にて開催することに決定した。

### 3. 理事会報告

#### 第102回理事会

日 時：2003年6月6日(金) 17:30～19:30  
場 所：上智大学10号館451室  
出席者：今井(理事長 敬称略、以下同様)、  
松下(洋)、山田(睦)、三田、小池  
(洋)、小泉(潤)、堀坂(書記)  
欠席者：後藤、二村、狐崎、大串、乗

#### <報告事項>

- (1) FIEALC日本大会の準備状況について山田理事(実行委員長)より報告があった。
- (2) 日本国学術会議にオブザーバーとして出席した三田理事より報告があった。

#### <審議事項>

- (1) 2002年度活動報告案を審議し承認した。
- (2) 2002年度決算報告案を審議し承認した。
- (3) 2003年度活動計画案を審議し承認した。

- (4) 2003年度予算案を審議し承認した。
- (5) 第24回大会の運営方針を検討した。
- (6) 退会者2名(小坂允雄、村松国宏)、入会者18名(高橋直志、ロランド・レケナ・ミナミ、佐々木裕、伊藤秋江、岩田晋典、中野あすみ、篠崎泰昌、渡辺森哉、奥田若菜、谷口恵理、清水達也、小森幹子、金村浩子、倉田量介、水谷裕佳、森戸千尋、野内遊、船橋恵美)を承認した。

#### 第103回理事会

日 時：2003年6月7日(土) 12:30～13:30  
場 所：神奈川大学16号館第2会議室  
出席者：今井(理事長)、松下(洋)、山田、  
二村、狐崎、大串、乗、小池、小泉、  
後藤  
欠席者：堀坂、三田  
議 題：  
(1) 第102回理事会審議事項、報告事項の説明  
(2) 第24回定期大会総会の進め方について打ち合わせ (書記：今井)

### 4. 定期大会・研究発表

#### 第1分科会《先住民社会の変容1》

- 「メキシコ市拡大によってのみ込まれた旧先住民村落の現在」  
　　禮野美帆(慶應義塾大学)  
　　/井上幸孝(立命館大学)
- 「伝統織物の意味変容—グアテマラ先住民村落の事例より」  
　　本谷裕子(慶應義塾大学)

- 「フリーユニオン」か「慣習婚」か？—メキシコ・ワステカ農村における「結婚」とジェンダー—  
　　山本昭代(東京農業大学)  
　　司会：山本匡史(天理大学)  
「先住民社会の変容1」と題された第1分科会では、メソアメリカの事例をとり上げた3つの報告がおこなわれた。報告者はいずれも本年9月に開催予定のFIEALC(ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟)第11回大会において同様のテーマでの分科会で報告を予定しており、論題・内容的にもバランスのとれたセッションとなった。

第1報告はかつて「先住民村落」であったメキシコ市南西部のコミュニティを対象とした都市人類学的研究で、都市共同体における紐帯を「地元民(nativo, ser de aquí)」という概念を通じて模索しようとする意欲的なアプローチを示した。続く第2報告はグアテマラ高地における先住民共同体の染織の生産

と使用の状況を伝統的連続性にとどまらず、現代における社会変化のなかで位置付けようとした実証的研究であった。そして第3報告ではメキシコ・ワステカ地方のナワ先住民村落における婚姻制度の変遷をたどりつつ、近代化と移民という背景のなかで生起する女性のイニシアティブの変化とその限界が明らかにされた。

4名の若手研究者によるこれら3本の報告はいずれも緻密なフィールドワークに基づいたものであり、先行研究をふまえながらも従来の先住民研究の枠組みを越えた斬新な視座を提示するものであったといえよう。初日の最初のセッションではあったが数十人の参加者を得、限られた時間ながらもさまざまな角度から核心をつく質疑応答がおこなわれたことで、各報告者の今後の方向性に少なからぬ示唆がもたらされたのではないかと思われる。

(文責 山本匡史)

## 第2分科会《グローバリゼーションと移民》

司会：田島久歳（城西国際大学）

イシカワ・エウニセ・アケミ（鹿児島国際大学）は、「ブラジルの出移民の現状」と題する発表で、まず1970年代ブラジル国内における農村から都市への人口移動が起ったが、80年代には移動先が海外へと変化したことを指摘した。その後、出移民先（アメリカ、パラグアイ、日本、ヨーロッパ諸国）の紹介および行き先別の移動動機、受け入れ国の関連政策、を紹介してから、海外におけるブラジル政府の自国民支援活動（法的支援を含む行政的対応など）についての分析を試みた。発表は、近年のブラジル人の出移民状況の流れを概観するものであるが、今後は出移民先ごとの特徴についてのより緻密な検証とテーマの整理が期待される。

福田友子（東京都立大学大学院）による発表「滞日ペルー人の移民過程－統計資料の検討－」では、カースルズ&ミラーの提唱する移民過程の4段階モデル（第1段階は若年の単身労働者の一時的移民が主で、海外送金と帰国志向が強い段階。第2段階は滞在の延長に伴い、社会的ネットワークが発達する段階。第3段階は家族呼寄せが開始し、エスニック・コミュニティが形成される段階。第4段階は永住権や市民権が獲得できるか否かの分岐点となる、永住の段階。）の検証を滞日ペルー人の事例をとおして試みた。具体的には主に入管協会の統計データを用い、フィールド・ワークに基づく資料が補足的に活用された分析である。

山脇千賀子（文教大学）の報告「リマにおける社会移動とグローバリゼーション－社会階層と空間の再編成－」においては、まずグ

ローバリゼーションとは「脱領域化」的性質をもつ空間的・時間的編成という社会的作用を引き起こし、従来の完結した一社会内での社会移動を前提とした「古典的」研究枠組みでは捉えきれない現実にアプローチする視点が必要になっていることが指摘された。そのうえで、90年代以降のリマにおける社会階層とそのライフスタイルに関する報告者の調査資料をもとに、グローバリゼーションが社会に与えている影響について検証し、新たな理論構築に一石を投じる試みとした。

イシカワ発表においては、入移民地域や出移民の歴史的背景と特徴の分析に関する一層の深化を、福田発表においてはフィールド・ワークの結果と理論的検証の整合性を、山脇発表ではケース・スタディーより広範な現地調査を踏まえた分析を、今後に期待したい。

(文責：田島久歳)

## パネルA 「文学と現代社会－都市・記憶・歴史」

コーディネーター 斎藤文子（東京大学）、  
久野量一（法政大学）、  
石井康史（慶應義塾大学）

過去が「歴史」としてではなく「小説」として語られることで、新たに開示されうるものがあるとすればそれは何か、その過去は現在とどのように連絡されているか、という問題意識にもとづいて、三つのケーススタディを報告した。

### ○「回想と歴史記述－テレサ・デ＝ラ＝バラ『ママ・プランカの回想録』における女性の物語について」 石井康史

『ママ・プランカの回想録』（1929年）は、世紀転換期ベネスエラのコーヒー・砂糖プランテーションにおける子供時代の回想であり、六人の娘たちとその母親の生活を活写する断片群から構成される。娘の要望に合わせて母が19世紀のロマン主義作品を自在に換骨奪胎し新しい物語へと変貌させるシークエンスが、女性による物語批判としての本作品の、物語構築にかかる主張を象徴する言説であるという作業仮説を、本発表ではテクスト分析をつうじて論証した。

### ○「バランキリヤとマコンド——歴史のない町」 久野量一

マコンドの創設から消滅までの忠実な年代記と思われがちな『百年の孤独』だが、テクストを丁寧に読むと、語りは必ずしも完全な編年体になっているわけではない。今回の発表では、この点に潜むガルシア＝マルケスの作意を解明すべく、作者が若いころを送ったバランキリヤという土地とのかかわりに焦点

を当てた。彼がこの町に寄せた情熱を考察するとともに、〈歴史のない街〉として書かれるバランキリヤの歴史記述を検討し、『百年の孤独』とバランキリヤ史が重なり合う可能性を見出した。またこの作業を通じて、ガルシア＝マルケスが征服・植民地・独立といった大きな事件ではなく私的出来事を描こうとする態度を身につけた背景に、バランキリヤ体験が深く関わっていることを示唆した。

○「バレンスエラ「武器の交換」における政治・ジェンダー・言語」 斎藤文子

1970年代後半のアルゼンチン軍事政権下の体験を、小説家はどのように表現できるかという一つの事例として、Luisa Valenzuela (1938-) の中編小説 *Cambio de armas* (1982) を取り上げた。記憶喪失ゆえに、自分を表現する言葉をもたない従順な妻が権威主義的な夫の絶対支配下に置かれているという家庭生活の裏側に、監禁された政治犯と軍部側の人間という別の物語があることを明らかにしていくこの作品は、政治暴力の恐怖のさなかに一体何を語れるのかという作家の葛藤から生み出されたものであることを明らかにした。  
(文責 石井康史)

シンポジウム1 「カルチャー・パワー・アイデンティティーエスニック運動の世界的意味と私たちの応答ー」

1. 太田好信 (九州大学) Looking Back to Move Forward, Together: Guatemala and Japan Caught in an Uneven Process of Decolonization
2. 山本純一 (慶應義塾大学) Los Zapatistas y el Imperio: posibilidades de la multitud
3. 鈴木茂 (東京外国语大学) Multiculturalismo y Conciencia Histórica en Brasil: Posibilidades de Movimientos Sociales
4. Daniel Mato (ベネズエラ中央大学) Organizaciones Indigenas, Cooperación para el Desarrollo, Antropólogos y otros Profesionales en la Producción de Representaciones de Identidades Etnicas

コーディネーター 石橋 純 (東京大学)

このシンポジウムに参加した発表者4名は、以下に示すゆるやかな発題にもとづき、最新の研究成果を反映したペーパーを準備し、大会に臨んだ。

まず第1に、「グローバル化」にともなう諸問題が全地球を席捲する1990年代以降、ラ米におけるエスニック運動はどのような状況で展開しているのか、という問い合わせ。「グローバル」「ナショナル」「ローカル」という主体

間の、《せめぎ合いの多様性》を、最新の事例研究の中から提示してもらおうという意図であった。第2点は、このような運動を研究対象とする「私たち」(日本／ラ米に拠点をおく研究者)が、運動に対して応答するしかたはどのような形で想像／創造しうるか、という問い合わせであった。学術研究という知的営為が、政治・経済・社会をめぐる同時代の地勢学と密接に結びついて発展してきたという認識が広く浸透しつつある現在、「民族」「民衆」の「文化」や「運動」を研究するという活動は、政治的に中立な「科学」ではありえない。では、「現地エリート」の戦略的本質主義を前に、研究者は沈黙するしかないのか？ このような問い合わせに対する4発表者の異なる立場が示されることを意図した。

企画の取りまとめを担当し、壇上で司会を務めた筆者にとって、企画意図がどの程度達成されたかを評価することは能力を超える。以下、そのような限界と偏向を前提として書き進めたい。

まず、山本発表では、問題の「解決」を志向する「実学」の立場から、新自由主義経済に対抗するサパティスト運動の可能性、また、サパティスト運動と共に鳴り響くNPO、NGO、協同組合の活動の可能性を示唆した。太田発表ではグアテマラ和平後問題とされる「脱植民地化」という鍵概念を取りあげ、この言葉のもつ歴史的位置や主体的行為への喚起力に注意を促した。この鍵概念から照射することによって、第2次大戦後の日本社会と旧植民地の人々との関係構築を「現在」の問題として捉えかえす可能性が提示された。鈴木発表では、ブラジルの黒人運動が少数派の異議申し立て運動から出発し、国政参加に至る発展過程を概観した。運動発展における「市民社会」の役割を評価するとともに、黒人運動が差異を前提とする新自由主義的社会観に回収される危険性も指摘された。マト発表は、米国スミソニアン博物館が毎年開催する「アメリカン・フォークライフ・フェスティヴァル、文化と開発プログラム」に関する資料にもとづき、グローバルな主体とローカルな主体の交渉過程を紹介した。件のイベントにおいて「環境」「生態系」「種の多様性」あるいは「文化」といった今日的な鍵語の意味やこれらを駆使した言説構成を運動家が集中的に獲得し、先進諸国のNGOや国際機構との交渉に用いる様が描かれ、「グローバル化」と一括される価値のやりとりの民族誌的文脈が明らかにされた。

今回のペーパーでは「現実の解釈」にとどまるマト氏であったが、運動との連帶の可能性について、印刷媒体に依存する学術論文という手段の限界を指摘。現実を変革すべく日々

運動にコミットする活動家は、主力メディアとして他に様々な方法やそれらの複合を選択している。研究者として運動に直接応答する際もまた、こうした媒体の多様性を考慮しなければ対話の可能性は開かれないことが指摘された。

こうしたマト氏の指摘を踏まえ、研究対象とする「民族」「文化」「運動」とのそれぞれの関りを日本側発表者3氏が披瀝したならば、この企画の主旨を踏まえた有意義な議論が展開したであろう。しかしながら、時間の不足によって残念ながらこのような意図は実現しなかった。司会者の力量不足を恥じ入るばかりである。

(文責 石橋 純)

### 第3分科会《イメージの想像》

司会 三橋利光 (東洋英和女子学院大学)

「イメージの創造」という思索的・芸術的表題を頂くこの分科会は、「インディヘニスモ」にかかる3人（メキシコ人類学者・ペルー作家・EZLN指導者）に関する報告である。

1. 大村香苗（お茶の水大学院）「マヌエル・ガミオとフランツ・ボアズにおける"nation"概念の比較（1909-1925）」は、米国人類学者フランツ・ボアズの影響を受けたメキシコ人類学者ガミオが、"nation"概念においては、なおメキシコの特殊性を意識し強調せざるを得なかった背景を丹念な比較方法により明らかにしたものである。会場での質問にあったように"nation"概念の明確化は必要であるが、今後の研究の発展が楽しみである。

2. 高林則明（京都外国语大学）「アルゲーダス『すべての血』の評価をめぐるノートー1965年の公開討論を中心にー」は、アルゲーダスの『すべての血』への評価が、当時の既成体制側（特にアンリ・ファーブルを含めた知識人層）によるアルゲーダスへのやや不公平と見られる個人的確執や無理解・批判・攻撃が底流となって、「不当にも」貶められるに至った過程を詳細に追跡した報告であった。緻密な研究態度に感服した会員も多かったろう。

3. 小林致広（神戸市外国语大学）「コウモリ人間とトウモロコシの人間—EZLNにおける先住民神話」は、世界を驚かせたEZLNのあのマルコスが語る「老アントニオのお話」が、時期的に1996年を境にしてそれ以前はチアパス・マヤのコウモリ人間という言説が支配的であったのが、それ以後はキչェ・マヤのトウモロコシ人間=真の人間という言説が支配的になったという変遷があったこととともに、そのお話がEZLNの使命感とも結びついていことを改めて理解できる報告であった。

インディヘナが置かれている状況とその突破口をイメージの創造に求めようとする今回の分科会企画は識見と含蓄がある。3人の報告を聴いた後に浮かぶイメージは、「自己と社会とのイメージの葛藤」とでも表現したらよいのかもしれない。

(文責 三橋 利光)

### 第4分科会《失われた20年？》

柳原 透（拓殖大学）、

久松佳彰（東洋大学）、

重富恵子（東海女子大学）、

渡邊 晓（東京大学大学院）

コメントーター 狐崎知巳（専修大学）

本分科会は、ラテンアメリカでの1980年代以降の経済/社会/政治の各面での推移を跡付け、到達点と現在の課題を明らかにすることを目的とした。「失われた20年？」という設問は、基本において経済面での実績についての評価から発している。本分科会では、3つの報告と討議を通して、経済面での評価の視点と基準を明示するとともに、社会面/政治面については、それぞれに固有な動因についての理解を示すことと、経済面での推移との関連を明らかにすることが企図された。

経済面では、過去20年間ににおける生産性の向上の欠如が示され、教育面での前進が経済発展に結実していないことが指摘された。ただし、チリ（そしてある程度はメキシコ）について、新たな経済発展メカニズムの確立（あるいはその萌し）を認めうること、そして背景要因として長期にわたる産業基盤の形成が重要である、との見解が示された。

社会面では、都市化の趨勢と「都市市民」のNGO活動の活発化に关心が向けられる一方、「旧市民」と「新市民」の対比、青少年世代の帰属意識、少年犯罪や暴力など社会問題にも注意が払われ、広範な貧困と社会分断が存在する中での「市民社会」の質が問われ、また不安・不満が高まりつづけた20年との総括がなされた。

政治面では、1980年代以降のラテンアメリカ地域における民主化と民主体制の定着の進展を確認するとともに、民主体制への広範な支持と政党・政治家の不信感が共存していることが指摘され、さらに近年の重要なイシューである官僚制や地方政治の改革についての考察がなされた。

以上の報告に次いで、80年代以降の経済改革の目的、内容、成果の評価、Human Security の観点からの現状の評価、経済・社会の変化の政治面への影響などの諸論点をめぐり討議がなされた。限られた時間ではあったが、経済/社会/政治の各側面を関連付けて問題提起し、またさらなる検討課題の確認

ができたことは大きな収穫であった。  
(文責 柳原 透)

### パネルB 「国際関係史におけるジャポニスモースペイン語圏と日本との関係を中心の一」

コーディネーター 浅香幸枝 (南山大学)

ジャポニスモとは、日本の物品や美術品に対する関心のことで日本趣味とも言い換えることができる。19世紀後半にフランスを中心に発達した。本パネルでは、それに留まらず、深く自然と結び付いた日本の文化・美術がヨーロッパ人などに与えた文化的影響をジャポニスモとして扱う。また、国際関係史においてそれを位置付けよう試みる。

最初に、ラウル・ニポン大阪国際大学助教授が「スペインとポルトガルにおけるジャポニスモの起源」を報告した。16世紀から17世紀のスペイン人とポルトガル人宣教師の書いたものから、ヨーロッパにおける日本イメージの際立った点を明らかにした。「色白、礼儀正しい、優美、有能、良く学ぶ」と言ったイメージが共通している。日本と中国はラテンアメリカと異なり宣教時に土着の文化を尊重するようにという位置付けがなされている。

今井圭子上智大学教授が「アルゼンチンの主要紙にみる戦前の日本観・日本移民観」で、戦前のアルゼンチンにおいて日本に対する関心が著しく高揚したのは日清、日露両戦争とその間に締結された日英修好条約を通してであり、これらの歴史的事象について掲載された日本に関する記事を資料としてアルゼンチンにおける日本観を明らかにした。「優れた開発労働力、自由移民・呼び寄せ移民の優位性、移住国への同化」を受入れ賛成論者は述べている。

浅香幸枝南山大学助教授は「ジャポニスモによる日本人移民の原初イメージ」の報告の中で、1912年、1917年、1920年(スペイン)、1958年(メキシコ)、1959年(グアテマラ)で出版された人気作家エンリケ・ゴメス・カリーリョの著作に見る日本像と日本人像は、パンアメリカン日系協会のリーダーとのインタビューとの比較から「誠実、勤勉、責任、技術」と重なる。1980年代から経済・政治で存在感を増し、さらに、アニメーションや自動車や精密機械、日本食のブームは第4のジャポニスモの波と言えるのではないかと指摘した。

以上の報告から、スペイン語圏における日本のイメージの良さは、宣教師の報告や過去のジャポニスモのイメージが繰り返され増幅されて今日に至っていることが確認された。政治、経済、文化のいずれが欠けても良好な国際関係は築くことはできず、アジアにおける

る日本観と比較した時に、日本とスペイン語圏との良好な国際関係が最初の良きイメージの出会いがあったことに起因していることはもっと評価して良いのではないかと思った。

フロアからの質問も活発な有意義な2時間となつた。

(文責 浅香幸枝)

### パネルC 「現代ブラジルにおける政治と都市問題」

コーディネーター 住田育法(京都外国语大学)  
コメンティター 山崎圭一(横浜国立大学)

○「現代ブラジルにおける新旧都市の役割と社会格差」 住田育法(京都外国语大学)

○「ブラジリアの社会格差と中央政府の社会政策」 谷口恵理(筑波大学大学院)

○「うるわしの都」リオ・デ・ジャネイロの社会・文化空間の一部としてのファベーラ  
田所清活(京都外国语大学)

○「ブラジリア建設・衛星都市形成の歴史に見るブラジル社会」  
奥田若菜(大阪大学大学院)

本パネルでは、現代ブラジルの民主化の進展、労働者党(PT)大統領の登場という政治変動を基底に、新旧首都の事例を取りあげつつ、広大な空間をかかえるブラジルの都市化における社会格差の問題を考察した。

まず、住田が総論として、ブラジル現代政治史における都市問題の展開を位置づけ、谷口恵理が、「ブラジリア連邦区における社会格差と政策—衛星都市低所得者層向け住宅政策」報告で、低所得者層向けの住宅政策である賃借住宅プログラム(PAR)に注目し、この実施地の一つであるサマンバイア(Samambaia)を取りあげ、現行の住宅政策の検証を試みた。田所清克は、「くうるわしの都」リオの社会・文化空間の一部としてのファベーラと題して、リオのファベーラ化現象を文学誌を通して検証し、さらにリオでは他の地域に比べてファベーラにおける富裕化の傾向があり、階層化も進んでいることを示した。奥田若菜は、「ブラジリア建設・衛星都市形成の歴史に見るブラジル社会」報告で、既存の衛星都市以外に、政府がファベーラの全住民を移転させるために建設を計画した、新たな衛星都市セイランジヤ(Ceilândia)の現実を、谷口同様、写真を利用しながら説明した。

各報告者へ山崎圭一がコメンティーターとして「大都市の社会変動の背後に情報化や脱工業化といった経済構造の変化が関係している

のか」、「政府の政策がどの程度住民の要求に対応できているのか」、「<文化>としてのファウェーラを残しつつ生活上の困難を解決する道はあるのか」など質問した。フロアからも、十分な時間を取りことができなかつたものの、「近代都市リオのライバルであるサンパウロの報告が欲しい」との指摘などがあった。こうした質問や要望は若い2人の研究者の現地調査を含め、報告者全員の今後の研究に生かされるにちがいない。

(文責 住田育法)

#### 第5分科会《自由論題》

司会：新木秀和（神奈川大学）

3名の報告と各々への質議応答が行われた。尾立報告へは、英領と比べた仏領の海外県のあり方や政策法制面での変化を問う質問があり、竹村報告へはモンヘ大統領の政策へのコメントがなされ、桑原報告についてはデータの読みに関する質問が出された。

テーマは別々だが、全体として「政治経済の諸問題」を討議する場となり、地域の多様性を改めて示しながらも、問題意識の相互関連が生まれたことは収穫だった。

#### ○「フランス海外県の創出と展開—マルティニークの例から」

尾立要子（神戸大学大学院）

「海外県」は、1946年に創出された。法案提出者のエメ・セゼールは、これにより植民地への社会保障・公正・社会発展の実現を考えていた。しかし、当初の構想とは異なり、本国同様の法律が適用されるには30年以上を要した。海外県は、80年代に「海外州」の制度化に伴い、非ヨーロッパに位置する「県」と定義付けられ、以後社会保障制度が本土並みに提供されていくこととなった。報告では、1) このような変化の要因を、「県」制度の変遷に注目しつつ、市民権の深化という観点から検討し、2) マルティニーク周辺の非独立地域との比較を試みた。

#### ○「コスタリカ1983年中立宣言再考」 ～再評価のためのフロー情報ストック化の試み（中間報告1）～

竹村 卓（富山大学）

2003年対イラク戦争をコスタリカ政府が支持したため、同国の言う「中立」、具体的には1983年11月「永世」「積極的」「非武装」中立宣言を改めて再検討する必要が生じた。「中立」という用語が使用されるに至った経緯、宣言が国際的に受容された過程には、解明されなければならない問題が残っている。解明のためには、今後、フローの多い中米紛争時情報のストック化を試み、その内容を継

続的に検証する予定である。

#### ○「ルーラ政権下の日伯関係—民間資金フローの見通し」

桑原小百合（国際金融情報センター）

日本からブラジルへの民間資金フローについて、政府、国際機関等の統計を使って近年の動向を分析した後、製造業や商社、金融機関などへのアンケート調査、ヒアリングに基づき今後の見通しを探った。ブラジルは中長期的に有望な投資先として位置付けられており、ルーラ政権についても好意的評価が多いが、当面は従来どおり慎重なスタンスが続こう。投融資先としてのブラジルの位置付けの見直し、新たなリスク回避手法の採用などが必要と思われる。

(文責 新木秀和)

#### 第6分科会《先住民社会の変容2》

司会 三澤健宏（津田塾大学）

#### ○「先住民と学校教育—メキシコの事例」

受田弘之（日本学術振興会特別研究員）

受田宏之氏は、メキシコにおける先住民の教育水準の低さについて、供給因と需要因から説明した。さらに、受田氏が現地調査を行ったケレタロ州、オトミーのコミュニティの事例が挙げられ、政府による資金援助プログラム（PROGRESA）の与えたインパクトについても述べられた。会場からは、子供の就学によって生じる機会費用と、教育を受けることのメリットの相関関係について等の質問があった。

#### ○ "Comunidades indígenas versus procesos de modernización"

Carlos Vicente Fernández Cobo  
(京都産業大学)

カルロス・ビセンテ・フェルナンデス・コボ氏は、近代化の過程が先住民共同体に対してどのような影響を及ぼすのかとの問題意識に基づき、先住民がその文化固有の経験知識を保持しながら同時に普遍的な文化を資源として利用することの可能性について、自身の考えを述べた。この点について、先住民言語が多数存在する状況でのスペイン語教育の果たす役割について質問がなされた。

#### ○「グローバリゼーションと現代インディヘナ青年層の生活・意識—オアハカ州とグアテマラの事例」

三橋利光（東洋英和女学院大学）

三橋利光氏は、庶民によるグローバル秩序の構築は可能かという問い合わせから、ラテンアメリカ

リカにおいては社会的に下層を占める先住民が、なかでもその将来を担う青年層が、どのようなアイデンティティを有しているかについて、主に個人主義志向であるのか、共同体志向であるのかという視点から考察した。事例としてはメキシコ・オアハカ州とグアテマラの若者へのインタビューが使われた。会場からは、先住民の青年層が、自身が国籍を持つ国家への帰属意識を越えて、移住先アメリカ合衆国での生活に関心を抱く状況をどう捉えるのか、といった質問があった。

- 「メキシコ、リヴィエラ・マヤ地域の観光開発とイメージ」 純谷茂樹（南山大学）  
純谷茂樹氏は、メキシコ、キンタナ・ロー州に位置するリヴィエラ・マヤ地域の観光開発戦略について、画像も用いながら論じた。具体的には、リヴィエラ・マヤに、有名リゾート地カンクンに付与されているイメージに対抗するかたちで、別のイメージが戦略的に付与され、開発が進められてきたその過程を追い、なぜ「リヴィエラ」と名付けられたのかについても説明された。会場からは、誰がどのような目的をもってそのような戦略をとったのか、といった質問がなされた。

このように発表テーマは多岐に渡り、「先住民」をめぐって様々な角度からの報告と質疑応答が行われた。

（文責 三澤健宏）

#### パネルD "The New Lula Presidency: Prospects for Brazil and Latin America"

The purpose of this panel was to explore the economic, social, and political consequences that the new government of Brazil is likely to have in Brazil, in other Latin American countries, and in intra-hemispheric relations. A related goal was to generate a debate on these issues and to stimulate further work on a subject that promises to be of the utmost importance during the next few years at least.

The panel was coordinated by Neantro Saavedra-Rivano (University of Tsukuba), and had the participation of the following scholars:

Prof. Nelson Altamirano, University of Tsukuba ("Impact on the South American energy sector").

Prof. Akiko Koyasu, Kanda University of Foreign Languages ("Political significance in Brazil and Latin America").

Prof. Mari Minowa, University of

Tsukuba ("Social policies").

Prof. Shoji Nishijima, Kobe University ("Macroeconomic impact in Brazil and Latin America").

Prof. Neantro Saavedra-Rivano, University of Tsukuba ("Impact on Hemispheric economic integration").

About 40 people attended the panel and a lively debate followed the main presentations. All presenters used PowerPoint files to highlight their main arguments, and this certainly helped to make the presentations more systematic and to convey efficiently to the audience the desired information.

All members of the panel were highly satisfied about the event and we expect to continue research on this subject.

Report prepared by: Neantro Saavedra-Rivano

#### パネルE 「20世紀ラテンアメリカ現代美術とシュールレアリズムの関係の再考」 大橋敏江（名古屋造形美術大学）、 中村尚明（横浜美術館）、 野中雅代（青山学院大学）

司会 加藤 薫（神奈川大学）

当パネルの開催理由は以下の事項に拠る。

(1) 最近のラ米美術研究の動向は『メキシコ壁画運動』の呪縛からの解放と、西欧現代美術の文脈で語られてきた言説への根柢的懷疑という二つの側面が顕著になってきている。この二面から重要再検討課題として浮かび上がってきたのが、シュールレアリズムの問題であった。しかし、(2) リアルタイムでシュールレアリズムを体験してきた研究者の世代交代で議論の基盤が脆弱化しつつある。(3) そのためシュールレアリズム運動の経験や成果をラ米文化という枠組みの中で語る時の残された課題に何があり、どのように次世代に継承してゆくか検討してみたかった。

中村尚明氏はウイフレド・ラムの1940年代の作品にアフロキューバ的なものと西歐的鍊金術の結合原理としてチュン(3)という中国の「道」思想の存在を示唆し、西欧人のラム研究では未着手の分野を明らかにした。フロアからの質問にもあったように今後はその表象が画面上の記号として解読されるのか、内面化された表現手法として存在するものの検討が課題であろう。大橋敏江氏はマリア・イスキエルド作品に対する定番的アルトナン・アルトーの言説を紹介したが、今後はそういった西欧側の評価のテクスト分析の必要性を改めて実感した。また絵画表現ではジョルジュ・デ・キリコやP・ゴーギャン作品の外縁にイ

スキエルド作品がある（これもまた西欧的観点！）こととメキシコ的であることの差異と同質性の検討が残されている。野中雅代氏はキャリントン、バロ、ラオン、オルナといった西欧から移住してきた女性美術作家をとりあげ、例えばキャリントンがケルト的魔術世界を意識しながら日常の手仕事を世界の変質に使っていったが、この種の創造力の源泉を検討してゆくことによってメキシコ的、あるいはラ米的特質が明らかになるという道筋を示した。フロアからは何故メキシコが西欧シュールレアリストに選ばれた土地となったかという基本認識に迫る質問もあったが、パネル内では十分消化できなかった。

(文責：加藤 薫)

## シンポジウム2 「グローバル化の時代のラテンアメリカ－21世紀に向けての提言－」

- 「構造問題と新自由主義循環を超えて－ラテンアメリカとアジアをどう交差させるか－」  
佐野 誠（新潟大学）
- 「失われた20年？」柳原 透（拓殖大学）
- 「多国籍企業化の功罪と国家の役割」  
堀坂浩太郎（上智大学）
- 「連帯経済－開発のオルタナティブか」  
小池洋一（拓殖大学）

司会：後藤政子（神奈川大学）

グローバル化の時代において新自由主義経済体制の導入は不可避であるといわれているが、貧困問題の深刻化を初め、その負の側面はあまりにも大きく、もはや座視することはできなくなった。それに代わり得る発展モデルはあり得るか。あるとすればいかなるものか。そこに到達するにはどのような道があるのか。本シンポジウムはそのための「希望の水脈」を求めるようとしたものであったが、新自由主義体制の不可避性や評価など基本的な点で報告者の間にも、またフロアにも、認識の違いがあることが明らかになった。しかし、具体的に検証すべき問題点がはっきりした点でシンポジウムは意義があったと言ってよいであろう。なお、当初、報告者として予定されていた吾郷健二氏が不測の事態のために参加が不可能になり、佐野氏に急遽、ピンチヒッターをお願いした。

佐野氏はラテンアメリカにおける新自由主義体制は大土地所有制などこの地域に長期的に存在する構造と「不幸な化学反応」を起こし、矛盾をいっそう歪んだものとしたと指摘し、新自由主義構造とラテンアメリカ固有の構造

とを転換し、新たな開発のパラダイムを積極的に模索・構築していくべきだと主張した。

一方、柳原氏は、当日午前に行われた同じ題名のパネルでの報告や議論の総括する形で報告を行ったが、1人あたりの経済成長率その他の指標をみても1980年代以来の20年間は経済的にも政治的にも社会的にも「失われた20年であった」と結論づけた。しかし、チリでは新しい発展のメカニズムが確立したとしており、新自由主義については必ずしも否定的ではない。一方、堀坂氏は、1990年代は多国籍企業のプレゼンスの大幅拡大とその「謳歌」の時代だった捉える。しかし、輸入代替工業化への逆戻りはできない以上、「多国籍企業を飼いならす」と、そのために「公正な市場環境整備」等の対策が必要であると提案した。グローバル化の時代においてはいかに問題は多くとも新自由主義以外に選択肢はないという立場である。

これにたいし、小池氏はブラジルの例を挙げ、市場・国家に「人民協同組合」等の連帯経済の原理を埋め込んだ開発のオルタナティブの構築を訴えた。「連帯経済は市場・国家に替わるものではない」としながらも、新自由主義の転換を求めるものである。

新自由主義をめぐる認識の差には「チリ問題」が影を落としている。チリの評価については、新自由主義においては労働のフレクシブル化が機軸の一つになっているときに、所得格差の拡大や貧困ボーダーライン層の膨張、あるいは一次産品輸出経済の限界などがチリ型発展を阻害しないのかどうか、選挙による政権の交代が続いていることをもってガバナビリティが確保されているとみなしてよいのかどうかなどの問題についての具体的な検証が必要だが、議論はそこまでに至らなかった。

いずれにせよ、新自由主義の矛盾を是正するために国家の役割が必要とされるという点では報告者もフロアもほぼ一致していたとみてよい。だが、では国家はどの程度、いかなる局面に介入すべきか、新自由主義がもっとも激しい形で浸透しているラテンアメリカにおいて国家の介入は可能か、などについては具体的に論じられなかった。堀坂氏が提起する「多国籍企業の飼いならし」や小池氏の「市場原理への連帯経済の埋め込み」についても、新自由主義のもとで国家が変容している以上、果たして可能なのかどうか。さらに、佐野氏や小池氏が指摘したように各国の相違もある。こうした問題を具体的に検証したうえで、議論すべきときがやって来たといつてよい。

このほかフロアから環境問題も含めた多角的な視点から新自由主義について論じるべきであるという意見など、さまざまな議論が出

され、最後まで活発に議論が繰り広げられたことは画期的なことであった。

(文責 後藤政子)

## 5. 研究部会報告

### 《中部日本部会》

中部日本部会は3月29日(土) 14時から17時30分にかけて名古屋大学言語文化部会議室で開催された。出席者は12名。今回の報告は若手研究者によるもので、メキシコの美術、「悲嘆行為」、及びブラジル音楽についてであった。特筆すべきは最初の2つの報告においてパワー・ポイントが用いられ、図像の表示や解析においてパソコンやデジタル・プロジェクターがその効果をいかんなく発揮したことである。

大野報告はリベラのヨーロッパ留学時代に焦点を当て、キュビストとしてのリベラがどのようにして壁画運動に目覚めたか分析した。ヨーロッパでは前衛芸術を学んだリベラだが、メキシコ帰国後は一般大衆のための芸術を創り出そうとして、必然的にそれから乖離せざるを得なかった経緯をわかりやすく説明した。今後、芸術思想面からより深い分析を期待する。

佐原報告はExvoto(奉納画)に読みとることができると一般的な大衆の心理を分析することにより、メキシコ女性のグリーフ・ワークを解明しようとした意欲的な発表であった。フロアからはExvotoの起源やマリアニスモとの関係について等、数多くの質問が出たが、Exvoto自体が今日で言う「癒し」の行為であり、女性のグリーフ・ワークであるという結論には説得力があった。

瀧藤報告はブラジルのアマゾナス州パリンチン市で、毎年6月末の3日間に開催される祭りのテーマ曲を取りあげたものである。発表では実際にいくつかの曲をテープで流し、実証的に歌詞を分析した。そしてそのテーマは時々の時代を反映し、そこには観客の興味を惹く意図が隠されていることを明らかにした。欲を言えば、環境サミットといったブラジルの社会・政治的な事象にも言及してほしかった。

以下は報告者による発表の要旨である。

(文責 田中敬一)

### ○「壁画家ディエゴ・リベラの誕生 —キュビズムから壁画へ—

大野友実(愛知県立大学)

ディエゴ・リベラはメキシコ革命後に、Arte de la Revolución「革命の芸術」を創造するために始まった運動である「メキシコ壁画運動」の三巨匠の一人として知られて

いる。しかしながら、リベラはメキシコ革命動乱期をヨーロッパで過ごし、キュビズムの画家として活躍した後、独自に壁画家へと転身している。そして1921年、リベラはメキシコに帰国すると、ヨーロッパの前衛美術の手法を使わず、古典的な写実主義でもって壁画を描き始めたのである。

本発表では、キュビスタであったディエゴ・リベラが、ヨーロッパ留学時代(1907年~1920年)何を描き、何を学んだかを紹介し、代表的な作品をいくつか分析した。そしてキュビスタ、ディエゴ・リベラが、どのような過程を経て壁画家ディエゴ・リベラへと生まれ変わっていたのかを明らかにした。

### ○「グリーフ・ワークとジェンダー—Exvotoから見る女性の生活世界と死生観(19世紀~20世紀のメキシコにおいて)ー

佐原みどり(名古屋大学大学院)

本研究の主旨は、EXVOTOに描き出されるメキシコ社会の変遷を追うことであった。EXVOTOとは、絵馬のような形態の奉納物で教会や寺院に信者の手によって奉納されるものである。奉納者本人の身や親近者に起こった「奇蹟」が絵画と文章でしめされ、それらの奇蹟を起こした神(各地に奇蹟とともに出現したキリストやマリア、また諸聖人)への感謝の表明である。奇蹟は主に苦しむ庶民のもとへもたらされた。EXVOTOから得られる学術的資料は、歴史的(描かれ記述される病気・痛み・不幸・祈りの変遷)、地理的(地形が設定する人々の日常生活の様子が描き出される)、社会的(祈りの内容からみる当時の人々の生活世界、政治的背景、家族関係等の考察)と大変幅広い。今回の発表では、こうした多彩なEXVOTOのテーマの中から女性の祈りに焦点を当て、時代の変遷(19世紀末から20世紀)と女性のグリーフ・ワーク(悲嘆行為)について考察した。

### ○「Boi-Bumbáの歌詞に見るアマゾンの描き方—瀧藤千恵美(名古屋大学大学院)

本発表では、ブラジルアマゾンで毎年行われる祭り「Festa de Boi-Bumbá」で用いられるテーマ曲(Toada)に焦点を当て、どのような内容が謳われているかを分析した。具体的にはカボクロを謳ったもの、インディオを謳ったもの、アマゾンの歴史を謳ったもの、そしてアマゾンの環境を謳ったものの4種類の歌詞について考察した。各要素は一貫してポジティブなイメージを植え付け、ネガティブなイメージの脱却を図っている。また近年の環境問題への関心の高まりにつれて、歌詞の中でも環境への意識を謳い、アマゾンの大切さを問うものが多くなっている。そし

てそれらは少なからず観光客を呼び寄せるための呼び水として貢献している。こうしたアマゾンの民のメッセージは祭りの担い手達にルーツを肯定的に受け止めさせると同時に、他者に対してはアマゾンに惹きつけさせるという戦略的効果も有していると考えられる。

### 《東日本部会》

日 時：3月29日（土）午後2時—5時  
場 所：上智大学10号館3階322室  
発表者とタイトル

#### ○「『モダン・アート』／『ポピュラー・アート』の恣意的区分を超えた相互通交の可能性に向けて」

網野航介（上智大学大学院地域研究専攻）

本報告の目的は、メキシコ・ミショアカン州内の先住民一村落に居住する「ポピュラー・アーティスト」と「匿名の工芸家たち」を事例に取り上げ、とりわけ後者の工芸家たちが制作するチャンゴ（悪魔）と呼ばれる造形作品に日常の生活や感情などの表現のくあとかた>を見ることで、そこに押し付けられた意味や範疇をその目論見とは別な多様なものにつくりかえている工芸家たちの実践・可能性の所在を指摘することにあった。

「ポピュラー・アーティスト／アート」はその定義上、「モダン・アーティスト／アート」との恣意的区分の上に成立つものである。そしてメキシコでは1980年以降、「ポピュラー・アーティスト／アート」という範疇が含みもつ意味内容には、その範疇を誰がいかなる目的のもとに生産し、どのような消費者を標的に、どの市場に流通させているのかによって違いが見られるようになる。しかし近年、州政府主導による観光市場の拡大が見られるミショアカン州では、その範疇が観光客の異国趣味を満たすポピュラーなるもの=チャンゴを広く伝達するための媒体として商業的に流用・活用され、先住民のいる地域社会、先住民村落に押し付けられているという状況がある。これに対して、先住民村落に住む工芸家たちの中には、観光客により「ポピュラー・アート」と呼ばれるに似つかわしいチャンゴの制作に従事している「ポピュラー・アーティスト」がいる一方で、「ポピュラー・アート」とは呼ばれながらも自らがチャンゴと呼ぶものの制作に従事している無名の工芸家たちがいる。後者は観光市場の文脈からは外れる日常生活のなかで造形作品の制作機会を見出している。そして、その機会を活用しながら、多様に意味化されたチャンゴをつくり上げているのである。例えば、チャンゴの姿形や表情や色彩への工夫や、チャンゴの背後に何気ない情景描写を添えるなどの視覚的差異

を用いながら自らの生活や感情を表わしている。そうすることで、工芸家たちは観光客を前にしてチャンゴを自己表現の所産として差し出し、さらにはチャンゴのもつ多様な意味に突き動かされた両者間のコミュニケーション=相互通交の触発を促がす発動因を築き上げていているのである。報告者はこのような大まかな過程を、先行研究の検討と自身のフィールド・データの分析から明らかにしていった。

#### ○「チリ生鮮果物輸出産業の発展過程における中小農の位置づけ」

村瀬幸代（上智大学大学院地域研究専攻）

本報告は、近年その成長が著しく輸出主導型モデルの成果を象徴的に表す存在となったチリの生鮮果物輸出産業について、その発展過程において中小規模の農家が置かれてきた状況という点からの分析を提示するものである。本報告で指摘したのは以下の3点である。第1に、産業の発展過程全体を通して見れば、企業家層や大規模農家に比べて中小農は相対的に競争力のない状態に置かれていたが、その位置づけは時期ごとに変化している。中小農の発展過程からの排除が進んだのは、1970年代と1990年代の2つの時期においてである。1980年代には、輸出ブームと契約生産の拡大によって、一時的にではあるが、中小農は輸出向けの果物生産に参入することができた。第2に、1970年代と1990年代において、中小農の排除が進んだ要因はそれぞれ次のようなものであった。1970年代では、中小農排除の要因となったのは、公的部門の縮小による資本アクセスの悪化と、競争的な農地市場における農地価格の上昇であった。限られた資本アクセスの下では、懷妊期間の長い多額の初期投資を要する果樹栽培に中小農が着手することは難しく、経済的に困窮した多くの中小農は農地の売却に向かった。一方、果物輸出市場の成熟と利益率の低下によって特徴づけられる1990年代には、契約条件の厳格化、農家の輸出企業に対する債務負担、輸出企業による担保農地の吸い上げというプロセスが観察されるようになり、中小農が再び排除されていった。

最後に、こうした状況に対し、生産農家間の水平的な連帯と輸出企業に対する交渉力の向上によって、契約生産システムの変容から生じる排除圧力を緩和しようとする試みが出てきている。こうした動きは1990年代のような排除の要因を克服する可能性を持っている。しかし、1970年代における中小農の排除は、土地や資本といった資源分配のあり方と、それを規定する制度的枠組みに起因しているため、その克服には民政移管後も踏襲されてき

た新自由主義的枠組みを超えた努力が必要である。

#### ○「農村の「シングルマザー」——メキシコ・ワステカの事例から

山本昭代（東京農業大学非常勤講師）

メキシコでは夫のない女性が子どもをもうけること、また夫のない女性が世帯主として家族を養うことは、全国的に見ても珍しいことではない。調査を行ったメキシコ・ワステカ地方のナワ先住民村サンタクルスにおいても、子どものいる女性に夫がないケースは10人に1人とけっして無視できない割合である。しかしメキシコでは女性とその子どもを中心とした「女性世帯主世帯」は、これまでおもに都市下層民の「貧困の文化」との関連で論じられてきた。また拡大家族の中に取り込まれることに多い農村のシングルマザーは「女性世帯主」とはみなされず、そのため農村のシングルマザーは調査の対象とされてこなかった。

サンタクルスではかつてはトウモロコシ栽培を中心とした農業が生産の中心だったが、1980年代以降国内都市への移民が増加し、今日では若い男女の大部分が都市に出ている。サンタクルスでは、女性が都市に働きに出るようになってからシングルマザーになる女性が増えたといわれるが、実際に調査してみると、80年代以前でも、婚外子の出生や乳幼児のいる夫婦の離別は珍しいものではなかった。しかし、かつては女性が夫なしで子どもを抱えた場合、子どもを自分の親などのもとに残して別の男性のもとに嫁いでいた。しかし祖父母に引き取られた子どもは、必ずしも祖父母の実子と同じ扱いがされるとはかぎらず、相続や教育、保護の面で不利益をこうむることが少なくなかった。

夫なしで子どもを抱えることになった若い女性が、自分で子どもを養うケースが現れできたのは、サンタクルスでは80年代以降のことである。その背景には、女性に賃金労働に就く機会が現われたことと同時に、学校教育が普及したために子どもの養育に費用がかかり、また子どもを労働力としては期待できなくなつたという変化がある。

サンタクルスで調査した23人のシングルマザーのうち、子どもを親元に残して都市で働くシングルマザー10人は全員、定期的に送金を行っている。夫婦で子どもを残して出稼ぎに行く場合、子どもの預け先に送金しないこともしばしばであるのに比べて、シングルマザーは送金に強い義務感をもっているようである。シングルマザーは親としての義務のうち、経済的責任を果たすことを優先しているようだが、シングルマザーはそのスタイルマ

ゆえに、村の親族らから受け入れられるためには、親としても娘としても、倫理的に正しく振る舞うことがより厳しく求められているのではないだろうか。

サンタクルスでは、社会経済的な状況の変化に伴って、女性が「夫のない母」になった場合にはどのように振る舞うべきか、かつてとは違った規範が示されるようになった。女性がひとりで親になるという、かつてはありえないと考えられていた家族の構築のされ方が、条件付きながらも社会的に認められるようになってきたのは確かだろう。

#### 《西日本部会》

2003年4月5日午後2時から5時にわたって、神戸大学において西日本部会が開催され、以下の2つの報告が行われた。

#### ○「チリにおける社会政策と貧困削減—90年代の民主政権下の経験を中心—」

葛城艶子

（神戸大学国際協力研究科博士後期課程）

本報告では1990年代におけるチリの社会政策の有効性について分析した。保健・医療部門では低所得層の健康状態の改善という効果が確認され、教育部門では初等教育に関して低所得層での就学率改善が見られた。しかし中等教育や高等教育では各階層間で依然として格差があり、特に高等教育に関しては10年間で低所得層と富裕層の格差が拡大した。また、保健・医療部門と教育部門において、例外的な項目を除いてその支出配分はきわめて累進的であった。これは、民営化やパウチャー制度の導入によって利用者の二分化（つまり低所得層は公的制度を利用）が促進されたという制度的な要因が作用したと考えられる。ターゲティングの運営・費用に関しては、チリの民主政権は軍事政権下で修正を経た資力調査（Ficha CAS-2）を用い、高い制度能力によって比較的低い費用で効果的にターゲティングを実施し、貧困層へ資源を集中的に配分している。

#### ○「中進国における経済自由化の進め方をめぐって——19世紀末のチリの事例——」

高橋直志

（同志社大学経済学研究科博士後期課程）

本報告は19世紀末のチリ経済の動向を分析対象としている。1873年大不況による経済的な打撃を回復すべく、隣国との戦争を断行して勝利を収めたチリは、硝石をステーブルとして未曾有の経済成長を遂げたものの、過度に關税に依存した歳入構造や外資による基幹産業の経営権の掌握、資本輸入や対外債務の増大などが災いしてインフレや労働争議が激

化した。こうした経済的成长と社会的混乱が併存した原因は、貿易の構造と国内の金融制度が1870年代を通じて激変したにもかかわらず、財政・国内政治のしくみと国際金融の動向が20世紀初頭まで本質的に不变であり、その結果として問題点がエスカレートしたからに他ならない。加えて本報告では、経済自由化のあるべき姿を検討しながら、国際市場における拙速な資本移動自由化の危険性と先進国本位の国際分業体制の弊害を指摘し、その対応策を担う国家と国際機関の重要性を強調した。なお、詳しくは報告と同じタイトルの拙稿（『経済学論叢』同志社大学、第54巻4号、2003年3月）を参照されたい。

当日の出席者は約10名で、第一報告に関してはチリでは貧困をどう定義しているのか、また、貧困人口の減少と並行して社会格差が増大しているのは何故かなどをめぐって、活発な質疑応答が繰り広げられた。第二報告に関しても、金本位制と共に採用していたチリとアルゼンチンで19世紀末物価動向が異なったのは何故かをはじめとして、様々な問題が提起された。

（文責、松下 洋：ただし、要約はそれぞれの報告者による）。

## 6. 『ラテンアメリカ研究年報』 第24号の原稿募集について

I 『ラテンアメリカ研究年報』第24号に掲載するための論文を下記の要領で募集します。募集対象は論文と研究ノート、および書評論文です。

原稿は未発表のものに限ります。ただし、欧文の論文にかぎり、既発表の和文論文の翻訳も受け付けます。

### II 日 程

- ・執筆申し込み締切  
2003年9月13日（土）
- ・原稿提出締切日  
2003年11月6日（木）
- ・第一次審査結果の通知  
2003年12月下旬（予定）
- ・修正原稿の提出  
2004年1月初旬（予定）
- ・再修正稿の提出（必要がある場合）  
2004年2月または3月
- ・初校校正 2004年4月（予定）
- ・再 校 2004年5月上旬（予定）

### III 執筆要領

① 原則として、パソコンまたはワープロで作成し、A4用紙に横書きで印刷してください。原稿は添付文書またはフロッピーディスクでも提出していただきます。ワープロソフトは一太郎またはMicrosoft Wordが望ましいですが、他のソフトで作成した原稿でも受理します。和文は32字×25行、欧文は60文字×25行で印字してください。注の部分もこの形式で印字してください。

② 制限枚数は、タイトル・謝辞・注・参考文献・図表等をすべて含めて以下の通りです。

和文論文—上記様式で30枚以内

和文研究ノート—上記様式で25枚以内

和文書評論文—上記様式で15枚以内

欧文論文—10,000語以内

欧文研究ノート—8,000語以内

欧文書評論文—5,000語以内

図表は和文の場合、印刷でき上がり1ページを占める場合は上記様式で1枚、½ページを占める場合は上記様式で½枚と換算します。欧文の場合は、1ページを占める場合は370 words、½ページを占める場合は185 wordsと換算します。締切厳守はもちろんのこと、提出時に上記制限を少しでも超過している原稿は審査の対象になりません。

③ 和文の場合、600語前後の欧文要約を作成してください（上記制限枚数の枠外です）。

④ 章立てや注の付け方など詳細な執筆要領は執筆応募者に別途送付しますので、書式を厳守してください。

IV 原則として審査は2名で行います。審査員の氏名は公表しません。また、原稿は返却しません。

V 執筆希望者は下記項目についてEメール、郵便、またはファックスで、年報編集委員長宛て（下記住所）に2003年9月13日（土）必着でお知らせください。

①氏名と所属、②連絡先（住所、電話、ファックス、Eメールなど）、③論文タイトルと種別（論文、研究ノート、書評論文）、④論文の分野（適任の審査員を選定する必要があるので、ある程度論文の内容がわかるような情報があることが望ましい）、⑤使用言語、⑥予定枚数または語数

2004年度年報編集委員長 小池洋一

〒194-0041 町田市玉川学園1-14-9

Tel & Fax: 042-722-9448

Eメール: yoichikk@m2.ocv.ne.jp

## 7. 本年9月のラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟(FIEALC) 第11回大会参加のお願い

第24回定期大会総会でも申し上げましたが、上記大会拡大実行委員会を代表して、会員の皆様のご理解とご支援に対し感謝申し上げるとともに、改めて積極的な参加をお願いします。

本年9月24-27日（水-土）に吹田市にある国立民族学博物館と大阪大学を会場として、「グローバリゼーションの経験と展望：ラテンアメリカ・カリブ海、アジアおよびオセアニア」をメインテーマとしてFIEALC第11回大会を開催します。

現時点の分科会申込件数は、外国人主宰45、日本人主宰15件、計60件です。発表申込の国別内訳は次の通りです。

メキシコ(129)、日本(109)、ブラジル(96)、ペネズエラ(36)、米国(29)、スペイン(13)、ペルー(10)、トリニダード(8)、英國(8)、コロンビア(5)、アルゼンチン(5)、フランス(4)、ロシア(4)、ドイツ(3)、インドネシア(3)、カナダ(2)、イスラエル(2)、チリ(2)、その他(24)、

計(498)。なお、地域研の短期招聘者と文科省シンポジウムの招聘発表者合計約20名は、上の数字に含まれていません。

メインテーマにあわせた上記の特別シンポジウムを行うほか多様多岐にわたる課題に関する研究発表がスペイン語、ポルトガル語、英語で行われます。ラテンアメリカ音楽と邦楽などのアトラクションも提供されます。プログラムや参加方法などは、大会ホームページをご覧くださるか、事務局にお問い合わせください。

すでに発表申込は締め切っておりますが、今後も内外の傍聴者（割引対象の院生、学生などを含む）、同伴者などの参加が見込まれ、数百名規模の大行事になりそうです。

大会ホームページにも明らかにしているように、SARSを理由として、予定を変更することはありません。ただし、参加者の安全を確保するために、要注意地域からの参加自粛要請など、状況によっては、内外で必要と思われる措置を取らざるをえないと覚悟しています。

日本で初めて開催されるラテンアメリカ・カリブ海地域研究関連の国際大会ですので、まだ予定していないかった方も是非参加して頂きたく改めてお願いたします。また、知り合いの方々や学生諸氏にもよろしくご吹聴ください。

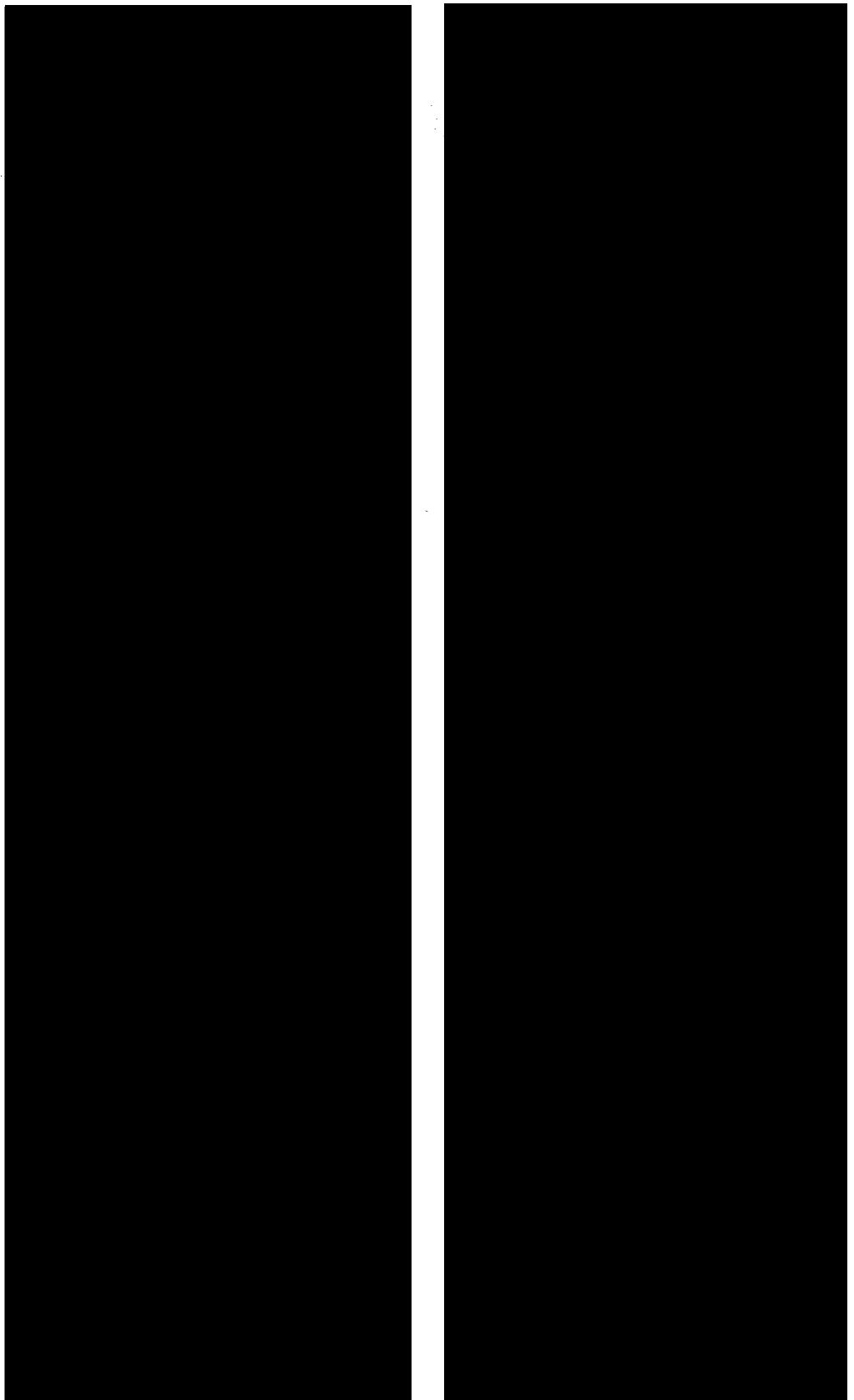
大会ホームページ：

[www.pac.ne.jp/fiealc2003/](http://www.pac.ne.jp/fiealc2003/)  
事務局メール：fiealc03@idc.minpaku.ac.jp  
事務局ファックス／電話：06-6878-8360  
電話：06-6878-8334（山田研究室）  
大会実行委員長 山田 瞳男

## 5. 事務局から

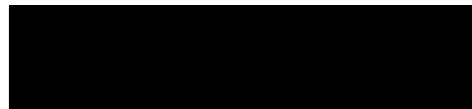
### I. 会員関係（a b c 順）





●

●



## II. 寄贈図書

- 吾郷健二『グローバリゼーションと発展途上国』コモンズ、2003年
- 鈴木康久『メキシコ現代史』明石書房、2003年
- 松下玲子編『メキシコの女たちの声—メキシコフェミニズム運動資料集』行路社、2002年
- 古谷嘉章『憑依と語り—アフロアマゾニアノ宗教の憑依文化』九州大学出版会、2003年
- C.L.R. ジェームズ著青木芳夫監訳『トゥサンニルヴェルチュールとハイチ革命—ブラック・ジャコバン』大村書店、2002年
- ラテン・アメリカ協会『中南米諸国便覧』2003年版、ラテン・アメリカ協会、2003年
- 上智大学イペロアメリカ研究所『日本・ラテンアメリカ関係日誌1978-2000年』上智大学イペロアメリカ研究所、2002年
- 『イペロアメリカ研究』第24巻第1号(2002年前期)
- 『イペロアメリカ研究』第24巻第2号(2002後期)
- 『ラテンアメリカ文献目録』1999年、2000年、上智大学イペロアメリカ研究所、2002年、2003年

## III. 出版物贈呈・出版物リスト送付のお願い

史學會（東京大学文学部内）発行の『史學雑誌』に毎年「歴史学界—回顧と展望—」が掲載され、ラテンアメリカに関する歴史研究もとりあげられます。つきましては会員の皆様のラテンアメリカ歴史研究に関する出版物あるいは出版物リストを史學會宛てお送りくださいます。宛て先は〒113-0003 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学文学部内 史學會です。

## 編集後記

本号は紙数の関係で一部寄贈図書リストを割愛せざるを得なかったほか、定期大会の研究発表報告もそれぞれの責任者の方々に限らせていただいた。FIEALC大会開催も迫り、会員の皆様の積極的参加によって成功裏に終われば幸いである。

(後藤政子)

No.81 2003年7月1日発行

### 学会事務局

〒102-8554

東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学イペロアメリカ研究所

日本ラテンアメリカ学会事務局

TEL 03-3238-3530・3535

FAX 03-3238-3229

E-mail : m-matsu@sophia.ac.jp

事務担当理事：堀坂浩太郎

秘書：松丸美佐子

## — 学会センターへの問い合わせ —

住所変更・異動の御連絡および会費納入に関するお問い合わせは直接、日本学会事務センターまでお願いします。

日本学会事務センター大阪事務所気付

日本ラテンアメリカ学会担当 中倉佳奈子

〒560-0082 豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル14階

Tel. 06-6873-2301 Fax. 06-6873-2300

受付時間 9:30-5:30 (土日休み)